校長室だより～燦燦～ №９８９

反応

2024.3.7

徐々にゴールが見えてきた。９８０号くらいからだろうか。残り２０号なのだから、読者の皆さんの心に少しでも残るような原稿を書きたいと意識するようになった。すると、途端に筆がとまった。文章が浮かんでこない。このへんが、アマチュアである。きっとプロは違うのだろう。

狙って書けるものではない。そのことを思い知らされた。何気なくふと考えたこと、少しでも心を動かされたことがあれば書ける。うまく書こうなどとは考えない。自分と向き合い、素直に身の丈に合った文章で綴る。これが、自分のスタイルである。無理をするのをやめた。

話でも文章でも、相手意識が重要である。誰が読むのか。どんな人が読んでくれるのか。いつも思いつくままに書いてはいるが、相手意識は常にある。話でも文章でも、たった一人に向けて話したり書いたりした方が、いい内容になる。そう学んできた。この「校長室だより～燦燦～」も、一番読んでほしい人がはっきりしていることがある。今回もそうである。

この原稿を読んでいただいている読者の中で、ここのところ一番よく反応してくださっている方がいる。家人と同じフロアで仕事をしている方である。したがって、その方のコメントは、家人を通じて私に伝えられる。このパターンが続いている。

この方は、私の小学校、中学校の一つ上の先輩である。もう２０年ほど前になる。この先輩から依頼があった。小学生の前で、イタリアの話をしてほしいというものだった。喜んで楽しみにしながら先輩の学校に出かけたことを覚えている。

いろいろな方から反応をいただくことがある。その中で、この方の反応がとても参考になっている。いや、大きな励ましになっている。いつも家人から話を聞くのだが、この方の反応が目に浮かぶようでうれしい。読者のお一人として、毎日読んでいただいていることに、まずは頭が下がる。逆の立場になり、誰かの原稿を毎日読みなさいと言われたら私にはできない。第１号から、すべて読んでいただいている方もいる。何と感謝の気持ちを伝えればいいのかわからない。

いただく反応の中には、「読者です」「ファンです」というものがある。これに勝るものはなく、ありがたい反応である。売れないものかきを目指すことにした私の背中を押してくれた反応である。狙っていいものを書こうとはしていない。だが、読者の皆様に何か恩返しをしたいという気持ちは強くなっている。

大切な読者の一人である先輩は、この原稿を読んで、家人にどんなことを話してくれるだろうか。楽しみである。先輩、いつもありがとうございます。